

過去の自分に仕送りをしたいと思うことがある。

二〇代の頃、わたしは地方在住のひとり暮らしの会社員だった。給料が出たらまず家賃と光熱費と貯金を別口座に取り分け、残りは予算を決めて一カ月で使い切る。そういう生活をしてきた。

あるとき百貨店でツイードのスカートに一目惚れした。わたしはそれがセールまで残っていることを祈り、セール当日に開店と同時に百貨店に入った。そして割引になったそのスカートを買った。

薄給だったのでお金を使うことが怖かった。一方で、予算の中で振り絞って好きなものを買うことが好きだった。

間違っていたと思う。わたしはもつと買うべきだった。小説を書くのはお金のかからない趣味なので小説家になれたが、わたしの目指すものが別のところにあつたら、投資を惜しむゆえになれなかったのではないか。友人の中には自分のために使うお金を惜しまない女性もいた。その時でなければできないことがある。ネタにできるという一点においても、やってあげよかったのだ。

そうこうしているうちにわたしは小説家になり、多忙になった。お金があっても使う暇はない。もうひとつの趣味であるバイクも売り、遠出をする場所といえれば一年に一度の謝恩パーティーくらいである。



絵・江口修平

未来へつなぐもの

青木祐子

パーティーが近いある日、わたしは百貨店でふらりとツモリチサトのスカートを買った。何に着ていくんですかと訊かれたので、わたしは少女小説を書いていて、これを着てパーティーへ行くのだと答えた。店員はびんと来なかったようだが、よかったですねと喜んでくれた。

わたしは締め付けられるような気持ちになつた。ツモリチサトの服はずっと欲しかったけれども、お金がなくて買えなかったもののひとつだったからだ。

あの頃のわたしに仕送りをしたいと思った。今でも思っている。わたしは彼女になんでもしてあげられる。おいしいものをこちそうし、観劇するならS席を取って、旅行をするならキャンプツーリングでなくユースホテルを使うのでもなく、豪華なホテルに泊まらせる。スカートが欲しいなら何十枚でも買ってあげよう。彼女は喜ぶだろうか。

今、わたしは地味な女性会社員の生活の小説を書き、節約をテーマにした話を書いている。書くたびにあの頃のことを思い出す。わたしは間違っていたと。しかし同時に、そういう生活をしていたからこの小説は生まれたのだということに気づく。無駄なことをたくさんした。セールの日の百貨店の開店を祈るように待つた。焼け付くように欲しいものがあつた。それが現在につながっている。わたしは今、彼女がらくさんの仕送りを受けているのでは？と思ひ、おかしな気持ちになる。